

【トピックス】

<令和元年度総会>

日時：令和元年6月1日（土）16：00～

場所：すき焼きはやし

令和最初の富山県少年硬式野球協会の総会が開催され、平成30年度の事業報告及び令和元年度の活動計画などが承認されました。

なお、新たな大会要綱（案）として

- ・投手の球数制限の導入
- ・公式試合において登録選手の全員起用

について審議を行い、今後「企画運営部会」において、導入に向けた大会要綱の改正等について審議することとなりました。

また、今年度より「ハードボールクラブ金沢」（石川県）の加盟申請があり、総会において満場一致で了承されました。



< 記念講演会 >

令和元年度の総会における「記念講演会」が開催されました。

講師：大塚一朗氏（富山第一高校サッカー部監督）



那智理事長にて、
大塚講師の経歴
紹介



まずは、2014 年国立競技場最後の第 92 回全国高等学校サッカー選手権大会の決勝戦ハイライト DVD を鑑賞し、大塚監督から講義をいただきました。

～ 何度見ても感動します ～

なお、御講義の骨子は以下の通りです。

【なぜ指導者の道を選んだか？】

- ・自身は 25 歳でチームより選手としての契約解除を言われた。サッカーから離れたかったが、イングランドへ行き、年老いてもサッカーを楽しむ本場の選手達。500 人しか観客がいない日本に対し、10 万人を収容するスタジアムを見て、改めてサッカーの魅力を感じ、子供達へその楽しさを伝えるべきと感じ、コーチとなるための指導を受けることとした。

【全国制覇できたのは、感謝の気持ちを持ち続けていたから】

- ・全国優勝したチームの決勝戦で得点をあげた選手 3 人のうち 2 人は、母親を亡くした子。スローインの際「お母さん」と声が無意識に出、いつも以上に遠くまで投げ、それが決勝点に結び付いた。

今ここにサッカーができるのは誰のおかげか？生んでくれた母がいたことを選手は忘れていなかった。自分のためのサッカーではなく、人のためにプレーする心と、常に感謝の心を忘れない選手が育ったことが一番の要因。その心を神が救ってくれたと思っている。

【全員が心を分かち合える言葉を持つ】

選手達には、考えさせ責任を持たせるため「ダイヤモンドナイン」と名付け、自分たちにとって大切な 9 の言葉を選ばせ、実践させている。

先の選手権大会優勝チームは、「感謝」を一番とした。この気持ちが得点につながった。

翌年の選手たちは、「勝」を一番とした。理由を聞くと「一年前の先輩達と比べると個々の能力は低く、まずは自分に勝たなければいけない。ということで選んだ。」と聞いた時に、子供たち

は、しっかり考え、成長していることを感じ取ることができた。

【指導方針の基本】

日大の林先生から学んだ、脳について紹介したい。

① 脳が止まる指導をしない。

【怒らない】

指導者が怒ると、脳が止まり考えることを止める。そこには、人としての本能が働き、危険を感じたら血流を抑える本能が働き、脳の働きが止まることになる。

脳が止まると、そのことが嫌いになり嫌いになる。

従って、指導者は決してどのような場面でも、怒ってはいけない。

指導の原点は、「楽しい」と思わせることである。

【ゴールを見せない】

水泳選手や、短距離選手など、ゴールが見えるとそこから記録が伸びない。

これは、もうすぐゴールという安心感が脳を止める。

水泳の北島康介選手は、プールの壁ではなく、「電光掲示板のタイムを見る」ことをゴールとしたことで、日本記録を更新できた。

指導者は、選手のゴールをもっと先に設定させる。

② 本番と同じ練習か？

【練習時間は試合時間と同じがベスト】

帝京高校サッカー部の練習場は、サッカー場の1/4の面積だが、国立競技場と同じ向きにコートを設定。過去7回の優勝を誇るが国立競技場の決勝で負けたことが無いのは、そのこだわりがあり、本番と同じ練習をしてきたおかげ。

とすれば、練習時間も試合時間と同じくすべき。選手の緊張感も持続しない。

効率よく短時間とすることで、選手自らが考えだす。

そして、練習は、与えるものでなく、楽しいものでなければならない。

富山第一高校では、選手にサッカーを楽しく思ってもらうため、練習を次のとおりとしている。

日曜日：練習試合

月曜日：休み

火曜日：ミニゲーム（勝ったチームに監督賞としてジュース進呈）

水曜日：攻撃練習

木曜日：守備練習

金曜日：紅白戦

土曜日：セットプレー

練習時間は2時間以内。

練習に楽しみを与えるため、全員が公式戦に一度は出場できるようにしている。

また、3年生全員による英国遠征を実施し、プロのユースチームと10万人収容できるスタジアムで試合を行っている。

③ ライバルがいるか？

あいつがいなければ自分が出場できるといったライバルはなく、あいつがいるから自分がやれる、あいつのために頑張らなければと思えるライバルが必要。

なお、終わりにあたり、指導方法について、参加者から多数の質問が飛び交う中、大塚氏から、野球指導者の指導方法について、逆質問を受ける場面も飛び出すなど、貴重な講演会となり、今後ご講演頂いた指導方針について、各チームが取り入れ実践していくところです。

